

壺井栄論 (18) — 第七章 戦時下の暮らし —

A Study of TSUBOI Sakae (18) : Life in Wartime

鷺 只雄

SAGI Tadao

一

前稿まで戦時下の栄の文学について、小説・児童文学・エッセイと三回に分けて検討してきたが、話が混乱するのを避けるためにストイックに作品にのみ話を限定してきたが、本稿ではそれを解禁して生活事象の面について考えてみたい。时期的にはおおよそ昭和15年(一九四〇)頃から敗戦の20年(一九四五)頃までについて取扱うこととしたい。

伊勢的の矢 栄の『暦』を読んだ読者には忘れられない印象的の日和山 な場面として、祖母の孫達に話す祖父甚作の話がある。

幕末、江戸通いの千石船の船乗りであった甚作は江戸へ向う途中、伊勢的の矢でコレラにかかって客死し、かの地の日和山に葬られた。二十六歳で未亡人となったかやは田舎の貧しい後家故に生涯一度も墓参がかなわず、代わりに十人の孫達にそれを託す哀切な話である。この祖母イソ(「暦」ではかや)は話が好きで、孫たちを育てながら沢山の昔話や伝説を語り、また子守唄を唄って倦むところがあったという。それは口碑伝説のたぐいばかりでなく、巷間に流布される噂話や世間話、更に夫や自分の身上話も含むというように、素材的にも形式的にも長短自在であり、語りは巧みで、しかもリズムがあり、その最も熱心な聴き手が栄であり、かわいがられて祖母の隠居所で育った。この祖母の存在が、いわゆるゆりかごの唄のように栄の文学の基

盤を形成したものと違ってよいであろうし、その記憶がパン種となつてやがて栄の文字を豊かに彩ることになる。

この祖母の悲願をいつかは必ず実現して祖父の供養をしたいものとして栄の胸中に引き継がれていた。機は漸く熟す。「祖父母のことなどを書いた『曆』の印税」が入ったからで、昭和十五年四月初めに妹シンの縁談の相談もあつて、小豆島に単身帰郷した帰りに的矢へ墓参りすることにして、あらかじめ新宿三越に行つて参謀本部発行の鳥羽の地図を用意してから出かけた。

シンの相手と言うのは聞き合わせてみると、弟たちが皆同居な上に、子供があり、他に出戻りの妹が子供連れで同居、親たちは村の爪はじき、という「お話」にならない家でどつと疲れが出て、繁治に宛て「からだの悪いせいなのか、的矢ゆきもどうでもいい気にもなっています」と一時はなげやりな気持ちにもなるが、それではならじと気を取り直して伊勢に向つた。

私はひとりで旅立つた。十三年前のことになる。私が、伊勢の的矢の日和山という文字を地図の上でさがし出したのは小学校六年の時だつた。おとぎばなしだと思つていた祖母の話に真实性を感じ、私は地図を祖母につきつけて、的矢の説明をした。その時に祖母の悲願は私の心の奥にひきつがれたのかもしれない。私は地図を頼りに的矢をたずねた。日和山は墓地のある丘であつた。霰の降る中で小さな石塔をのぞいて回つたが、分らなかつた。禅法寺という寺を訪ねると過去帳をみせてくれたが、一日一回の船の時間にせき立てられて、見当たらずに、祖母ではないが本意なくも帰途につかねばならなかつた。

〔伊勢の的矢の日和山〕55・1「婦人画報」全集6

行つては見たものの、地理に不案内、四月中旬を越すのにあいにくの悪天候の中、見づらい石塔を一つ一つ見て回つたが遂に見つからず、お寺で過去帳を見せてもらつて必死に探す、船便の出発が迫つていて不首尾のまま帰途につかねばならなかつた。

その本意なきが栄に再び火をつけ、昭和二十九年（一九五四）秋の再訪となつた。この時書かれたのが「伊勢の的矢の日和山」(55・1「婦人画報」)。

この時、栄は映画「二十四の瞳」(木下恵介監督 高峰秀子主演)の大ヒットで売れっ子の流行作家になつていたから、出版社側のプロデュースによつて全てに破格の扱いであつた。

初出には「写真小説」とあるように、当時人物写真家としては第一人者と言われた浜谷浩が同行して撮影し、九葉掲載されており、甥の芸大生を同行させ、宿は賢島の志摩観光ホテル、部屋は「陛下のお泊りになつた洋室」が用意され、船は遊覧船をチャーターして時間の心配は不要というように至れり尽くせりであつた。

墓石は先年無縁仏を一カ所に集めてコンクリートで固めて共同の供養塔としたために見つけるわけにはいかなかつたが、多勢の人と一緒に眠っているのを見て却つて安心する。

禅法寺の住職は十三年前に訪ねた時のことを覚えていて、過去帳の中に「小豆島勝蔵」(引用者注―祖父の本名は勝三なので、それに近づけたのである)の名があつたことを教えてくれた。

―勝蔵じいさん、おばあ代りに、孫とひ孫がまいったぞえ。いせまいるのついででなく、ここへわざわざまいったぞえ…

(同前)

昭和15年と29年の二度の探索行によって、漸く過去帳にその名が確認され、祖父は実に没後九十年ぶりに孫の栄によって供養してもらうことになるのであるが、この執念とも呼ぶべき悲願の実現は栄の祖母に寄せる限りない愛情の深さによるものにほかならないであろう。

『暦』出版 第一創作集(昭15・3・9 新潮社)は前年から

記念会 知合いとなった新潮社編集部、榎崎勤の口利きで

社との間に、発表された作品の分量が一冊分になったら本にするという約束が出来ていて、それが実行されたもので、初版四千部、定価は一円七十銭であった。この本は好評で、しかもよく売れ、版を重ねたので、壺井家を経済的に安定させると共に、前述のように末妹の二人の子供たちに何度も眼の手術を受けさせて、一人は消化不良で死んだが、一人は弱視程度には見えるようになり、また伊勢的矢へ祖父の墓参りの旅に行くことも可能にしたのである。

昭和十五年四月二十九日(月)『暦』の出版記念会が新宿のレストラン宝亭の二階で開かれた。会場は映画館の武蔵野館のすぐ傍という便利さもあつて盛会で、参加者は六十九名。司会は芥川龍之介の学友であり、繁治の旧友でもある江口渙が羽織袴で行い、なごやかに進化した。今ここに『暦』出版記念会と題する墨書された当日の出席者名簿(壺井栄文学館蔵)のコピーがあるのでそれによって記名順に紹介すると次のようになる。

佐藤俊次・同さち子・福田利吉・和田芳恵・三島正六・網野菊・永見恵・宮本百合子・宮本多賀子・落合栄一・菊岡久利・竹本賢三・村田意・加藤周吉・丸山義二・江森盛弥・高橋勝之・井汲卓

一・高橋茂枝・井汲花子・大月源二・岩本錦子・東保久喜・荻原四郎・戸台俊一・加藤悦郎・小熊秀雄・秋田雨雀・須山計一・手塚英孝・小川五郎・本荘一考・江口渙・太田慶太郎・同操・平武二・大道寺浩一・湯浅克衛・矢沢高佳・田辺茂一・深尾須磨子・堀内喜雄・大田耕士・藤川栄子・窪川稲子・中野重治・同卯女・原泉子・張赫宙・小山いと子・岡本潤・外村繁・間宮茂輔・近藤忠雄・同清子・細野孝二郎・松山文雄・前島とも・松山晋作・宮西豊逸・菊池侃・上野杜夫・久板栄二郎・矢崎弾・青柳優・窪川鶴次郎・打木村治・高見順・平野謙。

出席者はプロレタリア文学関係者と女流文学者・編集者というふうなみにてよいであろう。

この会の発起人というか、幹事役をかって出たのは松山文雄で、彼は『暦』の装幀を担当していたから張り切るのはよいのだけれど、肝心の会場の決定や会費や酒を出すか出さないか等の件について栄の意向を全く聞かずに記念会の通知を出してしまい、栄自身が通知をもらってからそれらを知るといふ始末で、夫の繁治に宛てた手紙の中では「ヒステリー」をおこして「やめて貰いたい位」と述べる程不本意なものであつたようだ。新全集に収録されたので次にそれを引いておく。

お手紙有りがとう。本当に。私の会、ずい分け臭いのね。此方のわがままが通るなら、やめて貰いたい位です。一円五十銭で酒でも呑むのだったら、私は出ないからと云って下さい。(これはヒステリーですが)(中略)

まあとにかく、酒はない方がよいという意見位は出してよいな

ら出して下さい。(中略)

何のかり合いもないのに、私の会が宝亭と聞くと、よけい、そんな気になるのはどういふのでしよう。松山さんは自分の好みで自分の会をやっているような所があるような気がするけど、これは私のひがみかしら。私が宝亭を知らないから知ら。何だか宝亭と聞くと堀田昇一の会なんかあって、ぐでんぐに酔っぱらっている光景しか浮かんで来ないのです。いやだなあ、と声に出ます。一そお茶の会にしたらどうだろう。

そう云って下さい。これは私の思いつきですが、ぜひお茶の会位にして下さい。そしたら会費も安くすむし、ぜひそうしてくれるようにたのんで下さい。

松山さんの番地を知っていれば私が出すのだけど、知らないから、ぜひもない。

本当にそうして下さい。さっぱりしていーと思います。そのあとで呑みたい人はのめばいいわけだから。どうしても宝亭になるのだったら、女の会に酒が出るのはぜひやめてほしいと云って下さい。くれぐれもお願いします。

十五日

栄

繁治様

高見順 栄は随筆「机」(40・5「文学者」)の中で、私は自分の**の批判** の机をもったことがない、とは言っても一度もなかったわけではなく、結婚した時にはちゃんと新しい机を一分不相応な程のものを一番に買ったのだが、亭主が入獄中知らぬ間に無断で友人に持ち去られ、机の主は留守なのだからよいではないかと事後承

諾させられ、亭主が帰ってきてても机は戻らず、従って思いがけず机とつながる生活になった今も、机はなくちゃぶ台で原稿を書いている。所が最近『暦』が出て印税が入ったので記念に何かを買おうと思案した末に机と決めて買いに出たのだが、結局机を買わないで下駄箱を買ってきってしまったと書いた。

これを読んだ間宮茂輔が『暦』出版記念会のスピーチで取りあげて、はつきりとした説明はしなかったが、こういうことを書くのはよくないと言った。

これを受けて高見は、やんわりとしかしきっぱりと「素人ということとを売りもの」にするのは「間違ったこと」であり、「文学に対する専門的な態度、即ち作家意識を持たねばならぬ」とたしなめた。

そして更に付言して、この栄の随筆を問題にする所以にふれてこうした発言は結果的に「素人」文学流行の変態現象に媚びてゐる形であり、(中略) 助長することになる」からだとして次のように続けている。

最近女流作家が異常といつていいほど数多く進出してきたが、この現象は「素人」文学がもてはやされるのと一脈相通するもののあるのが感じられる。最近進出してきた女流作家が「素人」だというのではない。女流作家に於ける一種の「素人」性がもてはやされている点があるのだ。女流作家にとつて、これほどの侮辱はない。侮辱の拍手である。この侮辱をはねかえすには、女流作家は強い作家意識を持たなくてはならない。(中略)

つまり誰でも「素人」「素人」の区別はない。文学に対する専門的な態度、作家意識を持つことによつて、文学の進歩に寄与

しうるところの文学を創造しうるのである。作家意識を軽蔑して「素人」振ることからは、何ものも生まれてこないし、作家意識のない「素人」文学は文学に何の寄与もなさないのである。

この「作家意識をもたなくてはならない」とする高見の好意的だが、しかしきびしい指摘は恐らくいわばプロとアマの未分化状態にあった栄にとっては、頂門の一針として、強烈な反省の一撃となつたに違いない。

猶、この高見の指摘にふれて窪川鶴次郎は「文芸時評—文学的意識の行方」¹⁰で発言すると共に、「素人文学」と女性との関係、その意識などについて問題を発展させて新見を提示して興味深いのだが、残念ながら当時更に深められることはなかつたようである。

映画化 栄は映画好きでよく観に行つて楽しんでいた。作家との契約 して名前が知られる前は、佐多稲子らに送られてきた

試写会の切符をよく利用した。その彼女にも遂に映画会社から栄の作品を買いたいという話が来て喜んだ。

最初は「赤いステッキ」(40・2「中央公論」)を映画化したいからと南旺が買ってくれ、次いで松竹が「祭着」(40・1・1「徳島毎日新聞」)を買いに来て、契約をすませ、原資料も貰つた。¹¹特に栄は松竹からの申出の方を喜んだ。作家としてスタートしたばかりでまだ二十にも足りない作品の中から「祭着」を見つけてくれたことがうれしかった。「祭着」は彼女の作品の中では最も短いものであるが、しかしそれを第二創作集の表題につける程好きな作品であつたからだ。しかし、どういふ事情からか、これら二作は映画化され

なかつたようで、調査中にはあるが確認はまだとれていない。

二

鷺宮に

栄にとつて昭和十五年はいろんな意味で、重要な、忘新居 れられない年になった。作家としては宮本百合子が擲揄して、「栄、文壇を席捲す」と評したように二月号の「新潮」に「曆」、「中央公論」に「赤いステッキ」、「文芸」に「廊下」と、作者を代表するばかりでなく、後世に残る名作を発表して、文名一挙にあがつた。

ジャーナリズムからの注文は飛躍的に増え、執筆本数は十五、十六、十七年には戦前最高の約60篇(小説から雑文まで含めて)前後に及んだ。

夫の繁治は昭和十三年七月から旧友小川信一(本名磯野信威、プロレタリア文化連盟書記長。父は理研所長。)の世話で堅気のサラリーマンになっていた。小川が出所後に理研コンツェルン傘下の富国工業(株)の重役となつたのを機に、旧同志を何人も入社させてくれたからで、入社時の月給は80円。従つて夫の収入だけで一家に経済的不安はなかつた。というよりも栄の原稿料収入や順調に版を重ねる『曆』の印税、翌十六年二月十日には『曆』が第四回新潮社文芸賞を受賞し、賞金千円が入るなどして俄成金となつた。

そこでまず第一に戎居一家(夫は繁治の甥、妻は栄の末妹)でその長女と二男が遺伝によるソコヒで生まれつき目が見えず、早期に手術を何度か繰返せば弱視程度に見ることができるといふ状況にあつた。結果として長女は手術が成功したが、二男の方はカゼをこじら

せて消化不良となり死亡した）の二人の子供に眼の手術を受けさせて、見えるようにしてやることと、それから長い間の借家暮らしに終止符をうつて新居を構えることとした。結婚以来15回の転居も終り、昭和十七年九月二十四日に中野区鷺宮に新居が完成し、そこが終の棲家となった。

きっかけは繁治の旧友で漫画家の加藤悦郎が鷺宮に日本電建の月賦住宅を建てて住んでいて、一定の資金を借入れれば毎月八十一円の掛金で住むからと、彼からしきりにすすめられたからである。

就職した時の月給は八十円であったが、その頃は百数十円になっていたし、栄の原稿料も入るので家を建てることに決心し、電建への加入手続や土地探しのことは一切加藤に頼んだ。幸い加藤は彼と同じ鷺宮の八幡様の土地を見つけてくれ、そこを借地（坪二十銭）として三十坪の家を建てることにしたが、坪単価三百円の他に、付帯工費を入れると一万円を越すので、電建からの六千五百円の他に市ヶ谷の帝都信用組合からも三千円を借入れた。十年間毎月八十一円ずつ返還する契約であったが、日米開戦となり、戦時下の紙の統制ということもあって予想に反して滞納しがちで、何度も差押えるとおどかされたりしたが、敗戦になって逆にインフレで貨幣価値が暴落した。今度は立場が逆転して集金人から毎月八十一円の集金のために来ていたのでは足代にもならぬから、残金の四千円を一括払いしてくれと懇願されて同情し、残りはいつべんに払った。

〈好事魔多し〉というが、新居へ引っ越した夜にハプニングがあって繁治は死の苦しみを味わった。引越し手伝いの親戚や友人にささやかな宴を張って、夜九時過ぎに寢床に入ると頭の後が痛んで大きくはれあがり、たえがたい痛さであった。手当てをしないと大事

に至る心配があるので、栄の肩によりかかって、まず交番に行くところも新米で戸惑っていたがある医院へ案内した。それは何と常安という婦人科の医院である上に、その女医さんの応対が冷たく、にもなく拒絶されてやむなく家に帰り、栄に一晩中水で冷やしてもらいながらもますます大きくはれあがるコブに死ぬのではないかと恐れた。夜の明けのを待って窪川鶴次郎の紹介状を持って駒込病院を訪ね、事無きを得た。原因はよく考えてみると、引越し当日に、大工が縁の下に鉋屑をいっぱい散らかしていたのを繁治が見つけて床下にもぐりこんで片付けた時に、床下の釘先に頭の後をひっかけて傷をつくったところからバイキンが入ったものらしかった。¹²

文芸銃後運動

講演会に参加

昭和十六年十月二十八日に東京駅発九時のつば出かけた（十一月四日まで）。文芸銃後運動というのは文芸家協会長菊池寛の発案によって、日中戦争下、国策協力と文芸報国を目的に文芸家協会が主催した全国遊説運動で、昭和十五年三月に発足し、同年五月六日浜松で第一回講演会が菊池寛らによって開催され、十六年十二月太平洋戦争勃発まで（十六年一月～四月を除く）毎月行われた。関東、甲信越、東北、朝鮮、満州、北海道、中国、四国、九州、樺太、と地域別に班を編成して、数名ずつの文学者を派遣した。昭和十七年五月、文芸家協会解散後は新たに結成された日本文学報国会が引き継いだ。

栄が参加したのは四国班で、一行は菊池寛・日比野士朗・海野十三・浜本浩・栄・佐多稲子の六人。稲子を除いた五人が皆四国出身なのに、長崎出身の彼女が一人交じっているには菊池の配慮があ

ったことを彼女はあかしている。それによると、菊池は栄がまだ新人で他の作家となじみがないのに気をつかって親友の稲子をメンバーに誘い、その上演旅行が終わると、二人で小豆島で講演したことにしてその分の旅費を出してくれ、栄と稲子は小豆島に遊んで栄や繁治の実家に泊まり、療養中の黒島伝治にも逢って話したという。公演嫌いを宣言して一切断っていた栄も、この時ばかりは菊池に壇上に十五分黙って立ってあげればよいからという説得に負けて何とかこなしたという。¹³

義姉一家の

栄の夫、繁治には戸籍によると、男四人（兄三人

帰省と帰国

がいる）と女二人（姉と妹）の六人兄妹があり、

長兄（男）は他家へ養子となったため、二兄（男）の伊八が跡を継ぎ、三兄（男）の嘉吉（明治28・1・21生まれ）はアメリカ航路の船員をしていたが、青年の客気に駆られるまま、一夜シアトル港外の海に身を投じて密入国に成功。雑貨商となり、妻を日本から迎え（栄と同じ坂手村の人で栄の三歳下）豊かに暮らしていた。繁治は四男になる。

ところで日米関係が険悪となり、戦争の懸念も強まってきたところから、このアメリカのシアトルに住んでいた兄の所では場合によっては一家で日本へ引き揚げることも考え、その準備もかねて義姉のタミエが二人の子供、睦美と昌三とを連れて十六年の春に日本へ帰ってきた。壺井家では横浜へ迎えに行くがその時仰天させられたのは、タミエが三万ドルの大金をうまく隠して税関を無事パスし、直ちに両替屋に行つて円に替えたことで、当時一ドルのレートは二円であったから六万円という莫大な金額であり、それをこっそり持

ち込んだ義姉の「抜け目なさと大胆さ」には舌を巻いてしまった。土産には立派なオーバーの生地やウォルサムの時計を買った。

小豆島の坂手村の生家に落着いた一家は早速子供達を村の小学校へ入れた。ところが、弟の昌三の方が問題を起してしまった。きっかけは昌三と村の子供らとの間で、日本の天皇とアメリカのルーズベルト大統領のどちらが偉いかという話になり、昌三がルーズベルトと言ったことが知れて学校内で一大問題になってしまった。

また、タミエはアメリカのスパイのように扱われ、刑事につきまといられることになんざりしてしまった。そこへアメリカの嘉吉からすぐ帰れという連絡が来たので、十六年の十一月にアメリカへ帰り、日米開戦となったのはシアトルに着いた数日後であったことを、戦後観光客として日本を訪ねてきた嘉吉から聞かされたという。

この嘉吉一家との交流は長く、栄の死まで続いており、何より注目すべきであるのは「二十四の瞳」をはじめ、幾つもの作品が書かれ、あるいは作品の中に投影されていることである。そのことについてはのちほどその都度指摘することにする。

三

相次ぐ

『暦』（40・3・9 新潮社）の好調な売行きに続いて

刊行

新潮社文芸賞の受賞も重なって続々著書が刊行されて

いるので、次に記しておきたい。

『祭着』

（40・10・15 河出書房）、『たんぼぼ』（41・4・25 高

山書院 再録1/9—これは収録9篇のうち、1篇が再録であることを

示す。以下同じ。『船路』（41・12・15 有光社 再録8/9）、『私の

雑記帖』(41・12・15 青磁社 随筆集)、『ともしび』(41・12・26 博文館 再録4/6)と続き、昭和十七年から敗戦前までを記すところなる。

『石』(42・7・28 全国書房 再録1/7)、『女傑の村』(43・7・26 実業之日本社 再録ナシ)、『小熊座』(43・10・10 三香書院 随筆集)、『夕顔の言葉』(44・2・20 紀元社 再録ナシ)、『海のたましい』(44・6・14 大日本雄弁会講談社)、『花のいのち』(44・7・25 葛城書店 再録1/6)他に空襲で配本直前に焼失したものに筆者は未見であるが『緋の着物』(45・5 毎日新聞社)、『海風』(45・5頃 河出書房)の二冊があるという。しかも、これらの本のうち昭和十六年刊行のものに再録の作品を多く含んでいるというのは、この時期における彼女の人気の程を示すものであろうが、戦争が激しくなるにつれて不要不急のものとして激減してゆくことになる。

栄、長篇小説

「夕焼」は栄の初の長篇小説で、朝日新聞社の「挑戦」に「婦人朝日」に半年連載(42・2・7)されたものである。詳しくは既に「戦時下の文学(1)」¹⁵に述べたのでそちらを参照願うこととして、ここでは要点のみにしぼって記しておくこととする。

朝日新聞発行の月刊誌「婦人朝日」編集部では昭和十六年の晩秋、連載小説を予定していた作家が日米開戦を目前にして徴用となり、急遽ピンチヒッターをたてなければならぬことになり慌てていた。

条件としては、ネームバリューがあつて、短期間に(連載は昭和

17・2・6)、半年連載で三百枚の小説(一回四十枚)を書いてくれる人ということであつたが、時勢が時勢だけにめざす人を得ることは容易ではなかつた。甲論乙駁の中で最後まで候補として残つたのは劇作家の真船豊で、もし戯曲ではなく小説を書いてくれれば大ヒットになるが、しかし真船氏程の大家になると半年三百枚の小説を秋から暮れまでの二カ月の余裕では、おい、それと引受けてはくれないという消極論がでてご破算になつた。

当時編集部にいた渡辺綱雄は、早くに佐多稲子から壺井栄の推薦を受け、デビュー作の「大根の葉」以来注意して読み続け、「暦」には特に「感銘」を受けたので機会があれば推薦したいと思つていた。が、この人は短編作家で、長篇向ではないと思つていたので、編集会議では推さなかつたが、有力候補が消えてしまつた今となつては、絶好のチャンス到来とばかりに持ち出して、栄は独得の世界をもつて既に作家としての立場は確立している、また、長篇小説は書いていないので冒険かもしれないが、それをあえてして作家によい作品を書かせて、あつといわせるのが朝日の伝統ではないか、云々と熱弁をふるい、当然「壺井栄に長篇小説は書けるか?」という声は出たが、では他に誰がいるのかと問えば自信をもつて指名する声は出ず、栄にきまつたのであつた。

その折衝には推薦した渡辺が当たることになり、初対面の栄に依頼の趣旨を伝えると「さあ、私に長篇小説が書けるかしら」と小首をかしげて即答は避け、「二、三日考えさせてほしい」という返事で、数日間考えてから決断したものであつた。

作品は栄の郷里小豆島を舞台に、対照的な性格の姉妹を登場させて、女の幸福とは何か、一年の殆どが夫との別居になる船員の家庭

は本当にしあわせなのか、等々の問題を姉妹、親子、恋人間でなまなましい現実の問題として提起され、追及されている。

作品としては意欲作であるが、姉の方は読者の共感を得やすいし、設定も面白いが、妹の方は屈折している分、図式的で操り人形のようになっていて議論が進行しない憾みは否定できない。それだけ物語の進行が遅れて、予定の六カ月では完結しないで最終回の末尾に「(前篇終り)」ということわり書きがつくことになってしまった。

その点で〈長篇小説〉にチャレンジした作者の意欲と勇氣は評価するが、客観的に見て成功作とは言い難い作品であろう。

この後編は「海風」と題して約一年後に書かれた。(もう少し詳しく言うと、壺井栄作品集4〔筑摩書房56・5・20〕「あとがき」にある栄の記憶によると「日本女性」〔43・10・12〕に連載したという。「日本女性」は大陸講談社から発行されていた雑誌で、稀観に属し、稿者も未見である。ところが栄のこの記憶を証明する新資料がこのたび見つかった。壺井家に昭和18年9月30日付栄宛大陸講談社からの封筒が残されており、その表に「海風」ゲラ刷〔在中〕と書かれていて、これによってその事実が証明されるからである。)前篇の姉の産んだ十七歳の直江をヒロインに、郵便局の同僚和田を配して全篇殆どが二人の対話になっている。その分、こぢんまりとまとまってはいるが、「夕焼」よりパワーは各段に劣っている。

池田小菊

と知る

昭和十七年の一月一日に熊谷に住んでいる妹一家の所から二尺程の見事な鯉を買ったが、料理する気にはなれず、モルトゲと名づけ(由来は坪田譲治の都新聞に連載中の小説に出てくる鯉の名を借りたのである。モルトゲ「ケとも」は一八

〇〇〇九一 プロイセンの天才的將軍)て四斗樽で飼っていたら、たまたま訪ねてきた友人が生まれた赤ん坊に乳が足りないのを鯉を探していたがどこにもなくて困っていたというので、一も二もなくあげることにきまってホッとする一幕もあった。¹⁷三日には繁治からお年玉と言って古本屋から見つけてきた菊池寛の『啓吉物語』(24改造社)をもらって読み耽り、一月末からは前述した「婦人朝日」の長篇小説の仕事をかかえて伊東温泉に行くが、食糧事情が悪く、出された外米でジンマシンになり、その上隣室の浪花節と流行歌の騒音にたまらず、散々な思いで二月早々に帰京する破目となり、二月には栄の作品が紙芝居化されてそれを楽しみ、林芙美子の誘いで女流作家の吉屋信子、真杉静枝らと一緒に八王子市へ車人形(移動できる車の上に乗って人形を操るもの)を觀に三月一日に出かけた。²⁰

四月中旬には同じく芙美子の誘いで女流作家の真杉静枝・山川朱美・栄の四人で江田島の海軍兵学校を訪ね、その印象を「江田島行」(42・4・28)5・2「都新聞」『子熊座』「前出」に収録)、「海軍兵学校訪問記」(42・6「婦人公論」)に書く。三日間滞在しての印象記であるが、この時期にはもはや意見や批判は一切許容されなかつたようで、全文兵学校礼讃、海軍魂讃美一色に塗りつぶされていて、露骨な国策協力となっている。

五月二十日、十三時東京発のカモメで小豆島に赴き、三十日に島を出て帰京する。往路の途中、京都で下車して作家の池田小菊と会い、その案内で東大寺戒壇院、法隆寺金堂の壁画などを見せてもらう。

小菊と知合ったのは一年程前で、彼女から本を出さないかという誘いがあったのがきっかけで、当時彼女は全国書房(大阪市南区)

の「女流作家叢書」の人選を社長から依頼されていた。栄は短編集『石』（42・7・28）を、その紹介で網野菊『若い日』（42・3・10）、中里恒子『家庭』（42・5・15）、佐多稲子『気づかざりき』（43・4・20）、真杉静枝『母と妻』（43・4・30）の五冊が次々に刊行された。既に旧稿で詳述したので詳しくはそちらを参照願いたい。

島崎藤村から 藤村が新潮社から依頼されて児童文学の書きおの執筆依頼 ろしを諸家に依頼して一冊編むことになった。

『新作少年文学選』がそれで、次に示すように当代の大家・中堅が名を揃え、そこに列せられたことは駆け出しの新人作家である栄にとつてはまことに光栄であり、名誉なことであった。次に作家と作品を記してみる。

石坂洋二郎「土曜日の夜」、高村光太郎「ぼくらの花、桜」、林芙美子「お母さんの飛行機」、豊島与志雄「ひれふる山」、尾崎喜八「新たなる曆」、和田伝「博士と大工」、丸山薫「船を眺めて」、坪田譲治「山の湖」、壺井栄「十五夜の月」、百田宗治「あしおと」、中里恒子「録郎と乳母」、真杉静枝「新高山と学校」、阪本越郎「旗」、深田久弥「山の少年」、中西悟堂「初雪の日」、佐藤春夫「父の恩」、火野葦平「人形と兵隊」、佐藤春夫「黒潮の歌」、芹沢光治良「遠い国の近い話」。

栄の「十五夜の月」は八十五歳まで長寿であった祖母（実在の祖母は八十二歳で没）の思い出を語って余韻嫋嫋たる作品であり、栄を代表する一篇である。

国策への 戦争の激化と共に、国策への協力体制も締め付けが強化されてゆき、有無を言わず指名され、おしつけられてゆく。

協力 「日本文学報国会派遣作家 壺井栄」として「読売報知」（42・10・2）に掲載の「日本の母（21）香川県棚田キノさん」（『子熊座』に初収時には「日本の母（一）と改題）はそういうもの一つであり、これは読売と日本文学報国会とが提携して「皇国の伝統に基く一大精神運動を展開」する目的で文芸人を特派して記事をのせたもので、高村光太郎・佐藤春夫以下の名が並び、第一回は菊池寛が昭和十七年九月九日に書いている。女流作家では栄の他には林芙美子・円地文子・岡田禎子・真杉静枝・大庭さち子・野沢富美子らが執筆した。

高松市から五里程山に入った東植田村に住む小作農の未亡人キノさん（59歳）は物置小屋のように小さなわらぶきの家に末子と長男の嫁と孫と住んでいる。彼女は小作人の娘で小作人の妻となり、貧苦のうちに夫が死んだ時には十六歳をかしらに六人の子が残された。四段五畝（一千三百五拾坪、四十五アール）の小作田にかじりつき、内職で支えながら、旧制中学を出した子もあり、末子は今農学校に通い、資産は一坪。四人が出征中で、二男が戦病死、末子も卒業したら志願を望んでおり、「おう、行け行け」と楽しみにしているという。「赤貧洗うがごと」き暮しの中にあつて「一家をあげて、お国のために進んで己を投出し得る」「ゆとり」、心の豊かさを淡々と叙述して美辞麗句は弄していない。

しかし、人間は戦争へ行くために生まれてきたわけではないから、棚田家の男は全員出征というありかたは永遠の貧困の繰返しであ

り、全員戦死という最悪の場合を考えれば、無様な現実の投影ということになる筈である。無論、そこまで言っただけではない。が、しかし、この場合、論理的必然としてそういう悲劇的事態が孕まれていることは確かである。

「日本の母(二)」（42年夏頃 初出未詳 『子熊座』収録）は群馬県桐生市に「軍国の母」笠倉とめさんを訪ねたもので、夫が戦死してあとに小四をかしらに五人の子と姑をかかえて途方に暮れるが、幸い地元の織物の内職が見つかり、七人の口を飢えさせまいと必死に働き、今は娘二人が女工として働いて母を助けている。その暮しを前作同様、淡々と描いてまだ見えすいた紋切型の賛辞を連ねることとはしていない。つまり、この段階では指名されれば協力はするが、その内実は暮しの苦闘のあとを淡々と辿り、言葉ではなく、事実で示すというふうには、これら二作はなっているようである。「一本の糸」（42・12「少女の友」）はこれと同じ素材で書かれたもので、内容的には同じである。

昭和十七年 栄の第一随筆集『私の雑記帖』（青磁社）が出た
のこと 縁で、繁治の詩集も出してもらえらることになり、

大喜びで繁治は原稿をまとめ、三月二十日に第一詩集『壺井繁治詩集』が青磁社から刊行された。大正十年前後から旺盛な詩作を続けていた詩人にとってはまことに遅すぎる第一詩集であったが、プロレタリア文学運動にかかわってその中心的役割を担わざるを得ない故の不本意な遅刊であり、それ故に時局柄刊行は無理とあきらめていただけに喜びは大きかった。

十一月頃、繁治は勤めていた科学主義工業社出版部（富岡工業

〔株〕から昭和十五年に同じ理研傘下の科学主義工業社に変わって来た）を危険分子のカドで職になる。翌年七月中旬頃から北隆館出版部に勤め、二十年一月二十五日にやめる。退職金千七百円を貰ってくるが、昔とは貨幣価値が違うので栄には感激はなかったが、生活にとっては打撃であった。以後、繁治は畑を借りて野菜作りに精を出し、勤めに出ることはなかった。

十一月初め、熊谷に住む末妹の貞枝がウイルス病で重体となり、一家で熊谷につめるが、五日に峠を越して一命をとりとめる。疲労で肝臓・腎臓が痛められたようだ。²³

九月末に完成した新居の祝に、宮本百合子から北斎の「山下百雨」を複製の額入りで、又栄の書齋に春信の複製版画を贈られる。²⁴

四

鷺宮の 大日本青年団が発行していた雑誌に「青年女子版」が
交遊録 あり、昭和十八年七月号から栄は「花のいのち」（同

年十二月号完結）と題する青春小説―小豆島の青年学校に学ぶ十三人の娘たちと賀川先生を描いた青春ドラマで、栄としては当時の学校や工場を見るにつけ、何の楽しみもない若者たちに束の間の喜びを得てほしい願いで書いたもの。

その編集者の榎田ふきと知合うきっかけは同じ町内に住む経済学者土屋喬雄が繁治と知り合いで、その紹介であった。土屋からは花一本ない、殺風景な壺井家の庭に萩や紫蘭やその他の草花が次々に根分けされてきて季節の花を咲かせてくれた。

榎田はマルクス経済学者民蔵の未亡人で、夫と死別した時は三十

五歳、十四歳と十三歳の二人の子供をかかえ、洋裁や保険の外交など職を転々としながらも二人の子供を立派に育て（長女は画家、長男は早大を出て朝日新聞社に勤め、特に大仏次郎「天皇の世紀」特別室のキャップとして連載終了まで貢献した）、この当時は「青年女子版」の編集をしていて意気投合、住居が通り一つを隔てただけということもあつて毎日のように行き来し、そうした中で宮本百合子とも出会つてその才能が認められ、戦後の婦人民主クラブ書記長・委員長から婦団連会長などとして活躍することになった。一家のことは栄のエッセイや小説「紺の背広」などに登場する²⁵。

話はあとさきになるが、実は鷺宮でまさきに知合いになったのは旧知の画家の三岸節子で駅前であつたり出会い、彼女は五丁目に住んでいて、果物屋と女医の常安田鶴子（前述の新居に引っ越した夜に診察を拒否された女医さん。後に栄の紹介で昭和二十年代後半のジャーナリズムで活躍し、特に「十代の性典」など〈性典〉映画でもてはやされた）を紹介してくれた。戦時中の乏しい暮しの中で果物屋もお医者さんもどれほど助けになつたかはかりしれないと感謝している²⁶。

文学報国会の 四月八日、文学報国会結成後初の国内大会が九

行事に参加 段の軍人会館であり、「女流作家は防空服装で

出席」しようとの申合せなのでモンペで出かける。「多少のきまり悪さ」はあつたが、会場につくと皆思い思いの活発ないでたちで、きまり悪いなどと思つたことがきまり悪い程。「この非常時の服装が女の平常着となる日は目前にせまっている」（「モンペの弁」⁴³・4・21「週刊婦人朝日」）と結んで国策協力の先兵の役を果たすよ

うになっている。

また、七月三日には同じく報国会主催の錬成講座田植作業に参加するため、埼玉県の鴻巣試験場へ行き一時間半田植をする。四〇人出席の予定であつたが、実際に来たのは十一人。女性は事務局の他は栄だけで、館内のタネ当てテストで一等となり、小豆をもらつて帰る²⁷。

この時期、栄は文学報国会のもとに依拠して四百字の小説「軍艦献納」（⁴³・5「婦人公論」）を書いている。新ちゃんは父の形見の赤銅製の軍艦を大事にしているが、お国のために「あっぱれの知恵」を出し、「お母さん、献納しましょうよ、その代り写真にとつておけばいいでしょう。この軍艦だつて、つぶせばいいぶん、お船をつくる釘が出来ますよ」というもので、大政翼賛会の建艦献金の運動に協力して書かれたもので、のち日本文学報国会編『辻小説集』（⁴³・7・18 八絃社杉山書店）に収録されるというように国策協力の姿勢を余儀なくされてゆく。

夏、講談社から「少国民の日本文庫」の一冊を書き下ろして刊行することを依頼されていたので上林温泉に行き、塵表閣の離れに二ヵ月滞在して『海のためしい』（命名は編集部による。刊行は翌44年6月14日）を書きあげる。

上林温泉に初めて行ったのは昭和十一年十月初めのことで宮本百合子のお伴でせきや旅館に滞在した。素朴で家庭的なところが気に入り、翌年二月にも「大根の葉」執筆後の疲れをとるために一週間滞在した。従つて上林は今度で三回目であるが、宿はすぐ近くの塵表閣に変えた。

そのわけは紹介者が林芙美子の夫、緑敏でおかみは信州出身の緑

敏の幼友達であったからという。この宿が気に入って以後鼻肩にするが、昭和二十六年以後、三十一年夏に中軽井沢の別荘が完成するまではこの宿と、そこから紹介された縁戚の山の湯という小旅館に殆ど毎夏滞在するのが恒例となった。

『海のたましい』は海国日本の将来を生きようとする小三の洋一を中心に、祖母のヨモギ摘み・祖父の柿の木育て・叔父夫婦の愛情・夏蜜柑のザル売り・鯛網曳き・父の戦死・双子の弟の誕生等々の事件を配して、それらが洋一に影響を与え、成長させてゆく過程をほぼ春から冬への季節の変化の中に詩情豊かに描いた佳作である。

ちなみに原稿を受け取った神吉晴夫は北隆館に繁治を訪ねて『海のたましい』の「内容余程気に入ったと見え、何度も何度も感嘆の言葉を漏らしていた。あれを二度も通読したそうだ。」(43・9・16 付栄宛繁治書簡)という反応もある。もう一つエピソードを紹介すると、この時の旅館代は約二カ月なので講談社からの印税内金五百円では足りず、更に延泊して滞在費を稼いだという一幕もあった。²⁸

誤解を招きやすいから念のために言っておくと、「海のたましい」という表題は作者がはつきりことわっているように、編集部でつけたもので、作者の意図はそこから連想される勇猛果敢な、海国を生きる日本の少年を描くというものではない。

無論戦争下の時代的制約はある。しかし、露骨な鬼畜米英式の無益な殺し合いの奨励などがないことは次の一事に明らかである。父の船が沈められた海にいつか弟と行って「海をにらみつけてくる」とだけしか言わせてはいないからである。戦争否定、無益な殺し合いの否定の意志がそこにあることは確かであろう。²⁹ 詳しくは前述の

拙稿を参照していただきたい。

この作品の一部を改稿・解題して成ったのが「柿の木のある家」(49・4・20 山の木書店)である。

十月十六日、故郷の小豆島芦ノ浦で療養中の黒島伝治が没した。享年四十四歳十カ月。

十二月、ラジオの仕事で彦根に行き、風邪を引くが、それを押しつけて小豆島へ足をのばしたため回復が長びき、年末ギリギリになって漸く帰京する。³⁰

五

卓の結婚 昭和十九年二月十三日に岩井卓と吉水順子の結婚式が横浜の伊勢山皇大神宮(横浜市西区宮崎町64に現存)であり、栄は夫婦で出席した。³¹ 栄の長兄弥三郎は香川師範学校を優秀な成績で卒業し、そのまま付属小学校の教師となり、特に音楽の面で将来を囑望されていたが、岩井家の破産という経済的苦境を乗り切るには薄給の教師では不可能として思い切りよく辞めて弁護士

の道に入ることを決意し、上京、夜間の小学校教師などをしてながら苦学中、大正八年折柄世界的に流行したスペイン風邪で急死。あとには二十二歳の未亡人と典(三歳)と卓(一歳)の二児が残された。未亡人は健気にもマッサージ師の免許状をとり、広島で商売を始めるが、順調に発展して長男は一級建築士、二男の卓はジャーナリストになって東京に勤めていた。

時局柄簡素に行われ、式には新郎新婦・仲人夫婦・栄夫婦・吉水のおばさん・親代わりに朝明さん、宴席では戎居仁平治一家五人・

林（栄の長姉であろう）、吉水の親戚という少人数のものであったが、兄の典は広島から出席した。³²

卓らは横浜市南区庚台53（当時の戸籍の表記。『右文覚え書』で栄は「ここに生まれ、ここに育ちここに青春の喜びの日を迎えた順子は、ここで又短い生涯を終わったのだ。」と記している。）に住み、この年十九年九月十一日には長男右文^{みぎふみ}が誕生。しかし、卓はその頃、中国に渡り、上海（南京ともいう）が詳細は不明）の新聞社にあって、右文の顔は見えていない。翌二十年四月十五日に死亡。兵隊ではなく、最後の職場であった南京の「大陸新報」の社員であったことが幸いして戦後、遺骨は社の同僚の胸に抱かれて帰った。³³

順子も当時の食糧事情の悪さと腸チフスから昭和二十年十月八日に死亡。³⁴ 右文は孤児となる。彼女の遺言もあって葬式の九月二十九日右文を栄がひきとり、³⁵ のち養子縁組をした。³⁶

『夕顔の言葉』

その他

昭和十八年末頃までに栄は児童文学作品を二十篇近く書いているが、それらを集めた最初の童話集がこれで、「港の少女」「餓鬼の飯」など八篇が収録（44・2・20 紀元社）されている。

六月十四日には前述の長篇書き下ろし童話『海のたましい』が刊行され、好評であった。

七月二十五日には『花のいのち』（六篇収録 葛城書店）が刊行。この年は三冊と年々刊行点数が減少するのがはつきりする。

この頃、フィリップやチェホフを愛読する。³⁷

また、第一回一葉賞の選考委員となり、辻村もと子『馬追原野』を受賞作と決定し、その選評を「戦時女性」（44・6）に書く。

柿泥棒 十月中旬、栄は移動劇団と一緒にのんびり四国旅行を
にあう した。留守番の繁治が一日、宮本百合子宅に遊びに行

くと、丁度その日は獄中の頸治の誕生日でその御祝に栗御飯を炊いたところというので夕食をご馳走になる。栄が旅行から帰ってみると、近所の農家から五円で買って植えた柿の木が一昨年は最初の当り年で、どの枝にも手が届くほどの高さながら、鈴なりに実をつけたので大喜びして近所の友達に一枝ずつ贈ることを約束したりした。ところがある朝、百個ほどつけた柿の実は一つ残らず消えてしまった。あとには二人の足跡が点々と残されていた。栄が口惜しく思ったのは、実りをつけた木への御褒美に赤い実を一つ木守りとして残す風習があるのにもかかわらず、一つも残さずとっていった無情さに対してであった。

今年も又当り年で日毎に色づいて来る柿の実を見ると泥棒のことが気にかかって、泥棒よけに柿の木のまわりに古いトタンを置くことにした。トタンは踏んでも、とりのけても音がするからである。しかし、そんなことを考えつかねばならなかった自分の気持を悲しく思わずにはいられない。³⁸

六

空襲による

惨禍・惨状

昭和二十年一月十九日、毎日新聞出版部へ『緋の着物』の原稿を渡す。この本は北京で出版され、定価は十円というが「不思議なことのある世の中なり」との思いを強くする。⁴⁰ その通りで、五月二十五日の空襲で一冊も手にしないまま焼失。また、『海風』も河出書房から刊行するが、見本一冊は受

け取ったものの空襲で焼失⁴¹。一月二十五日に繁治はそれまで勤めていた北隆館出版部を反戦運動のカドで鹹⁴²になり、そのまま勤めず、畑を四アール（百二十坪）程借りて食料増産に励んでいた。

二月八日、甥の岩井典が広島から清水組本社への出張で来たと訪ねて来て一泊。三十一歳になり、暮れに女の子が産まれたというので、メリンス大巾一丈をプレゼントする。お土産に広島海苔二十帖、真澄に三十円くれる⁴³。

三月九日午後、繁治が小豆島へ帰郷し、到着したところ同夜の東京大空襲を知り、早速とんぼ返りをしようとするが、切符は発行停止となっているなか、八方手を尽くして漸く三月二十五日に帰宅し、家の無事を知る⁴⁴。

四月、空襲が心配で佐多稲子が二児を連れて戸塚から鷺宮二丁目に栄の世話で転居してくる⁴⁵。

六月二十六日、櫛田克己（ふきの長男）の結婚式に、繁治の新調して殆ど手を通さない紺の背広やトランクを貸すが前述のように空襲で命から逃げたため焼けてなくなる。

七月、栄も稲子も、宮本百合子から「昨今は収入がないから大変」といわれる状況であった⁴⁶。

八月十三日、敗戦を知り、知人の佐々木克子と添田知道に教える⁴⁷。

そして、十五日に敗戦となるが、「茶の間日記」の中に栄は「歴史の改まる日」とのみ一行記している。

*1 注記中の「全集」とは『壺井栄全集全12巻』（97・4・1）99・3・15 文泉堂出版）をさし、そのあとの数字は巻数を

示す。

*2 栄の引用は全集からとし、全集未収のものについては初出または初収からとし、表記は全集に準じた。栄以外の人の場合は初出からとし、表記は全集に準じた。

*3 注記は原則として元号ではなく、西暦とし、19・20を省略している。

注

1 栄「ある日の私」（40・5・5）「文芸情報」全集11。なおこの文章には栄の父が五十年程昔一度詣ったことがあると、記している。

2 40・4・15日付栄から繁治宛書簡（全集12）。

3 「自筆年譜」（64・4・20）昭和文学全集ルビーセット19『佐多稲子 壺井栄』角川書店）に昭和15年9月に、繁治・発代と共に的矢の祖父の墓を再訪するも発見できず、とあるがこれは信用できない。理由は再訪の記録「伊勢の的矢の日和山」（55・1「婦人画報」）に、この9月訪問のことは一言半句の言及もないからである。私も曾て執筆した「年譜」（全集12所載・日外アソシエーツ版書誌大系壺井栄）に「自筆年譜」の既述により15年9月再訪の事を記したが、この既述は今回の検討でカンチガイと思われるので削除する。

4 網野菊「壺井栄さん」（『月報4』68・8）壺井栄全集4 筑摩書房）。

5 出版記念会当日の集合写真による（壺井繁治他編『回想の壺井栄』73・6・23 私家版）。

- 6 注2の書簡に同じ。
- 7 同前。
- 8 高見順「文芸時評」(40・6・13「新風」)
- 9 同右。
- 10 40・9「日本評論」。
- 11 栄「歳末日記(上)(下)」(40・12・25、26「都新聞」)、同「もの知らず」(41・3「映画」)初出未見『私の雑記帖』収録。
- 12 壺井繁治『激流の魚』(74・4・15 立風書房)。同「わが家の思い出」(60・6「笑いの泉」)。
- 13 『文芸年鑑2603年版』。佐多稲子「壺井さんとの旅」(68・1・10「月報62」筑摩書房版現代文学大系39)同「小豆島再訪」(87・1・1「四国作家」11号)。栄「銀杏の落葉とふるさと」(42「香川県学友雑誌」)初出未見。『子熊座』収録。
- 14 壺井繁治『激流の魚』(前出)。
- 15 拙稿「壺井栄論(15)―第六章 戦時下の文学(1)」(06・3・20「都留文科大学研究紀要63集」)。
- 16 渡辺綱雄「壺井栄の処女長篇小説」(86・6・5「芸文東海」7号)。当時「婦人朝日」は月刊なので、渡辺の言う「一回四十枚」とすると、「半年連載で三百枚」というのは数字があわないが、しばらくこのままにしておく。
- 17 栄「鯉の記憶」(42・5「科学思潮」)初出未見 『子熊座』「前出」収録。
- 18 42・2・12付池田小菊宛栄書簡(日本近代文学館蔵)。
- 19 栄「紙芝居」(42・春「紙芝居」)初出未見 『子熊座』「前出」収録。同「モルトゲ」(初出未詳 全集11)。
- 20 栄「バスの中で」(42・9「女性生活」)。42・2・26付栄宛林芙美子書簡。
- 21 拙稿「壺井栄論(15)―第六章 戦時下の文学(1)」(前出) 参照。
- 22 壺井繁治『激流の魚』(前出)。同「年譜」(89・3・1 壺井繁治全集 第五巻 青磁社)。科学主義工業退社・北隆館入社社については次のような食い違い―『激流の魚』では科工のクビは「引越してから間もなく」、北隆館入社はあいまいで、十八年中頃、退社は不明。一方「年譜」では科工のクビは十月、科工退社の同月十月に「北隆館転職」とし、十九年三月に退社としている。これについて私は次のように考える。科学主義工業を誅首されたのは両者とも一致しているように十七年十月と見てよいであろう。その次に北隆館に就職したのは年譜の同月に同月とは考えにくい。壺井家蔵の newly 出書簡(一) 43・8・28付 栄宛橋本英吉書簡に、繁治が「北隆館にはもう通っていますか?」とあり、(二) 同じく43・8・26付栄宛繁治書簡に「月給は七、八月の税金を引かれ、手取り百七拾五円」とあるところから考えて北隆館入社は昭和十八年七月中途からと推定される。そして退社は新出の「茶の間日記」(全集12) 45・1・25に「繁治、今日限り、北隆館を退職。退職金千七百円を持ちかえる。別に感激なし。昔なら大金なのだが。」から昭和二十年一月二十五日と判明する。
- 23 42・11・6付高橋茂枝宛栄書簡(全集12)。42・11・6付池田小菊宛栄書簡(日本近代文学館蔵)。
- 24 栄「薺入り」のことなど」(51・5・30「宮本百合子」宮本百合子追想録編纂会編 岩崎書店)。

- 25 栄「鷺宮二十年」(61・5「隨筆サンケイ」全集11)。同「紺の背広」(47・8「西日本」初出未見 全集3)。同「めがねと手袋」(46・4「革新」全集3)。榎田ふき『たくさんの足音』(55・6・10 草土文化)、同『二〇世紀をまるごと生きて』(98・4・10 日本評論社)。榎田克己『歴史の旅路』(85・4・25 私家版)、宮本百合子『その人の四年間』(50・3・31、4・8、4・15、4・22「婦人民主新聞 宮本百合子全集19」)
- 26 栄「鷺宮二十年」(前出)。
- 27 栄「田植の日」(43・7・9～11「東京新聞」)。
- 28 43・9・22 付繁治宛栄書簡(全集12)。
- 29 拙稿「壺井栄論(16)第六章 戦時下の文学(2)」(前出)。
- 30 44・1・20 付池田小菊宛栄書簡(日本近代文学館蔵)。
- 31 栄の書く所謂「右文もの」では卓の結婚式の「仲人」(例えば「右文覚え書」)になったと書いているが、新出の44・2・9付壺井繁治宛卓書簡(壺井家蔵)によれば、仲人は別にいたようであり、とすればここにはフィクションがあるかもしれない。「たからの宿」(49・3・25 アテネ文庫 壺井栄全集4)によれば、順子とは社内恋愛で、同社の女性記者であったという。新出の44・3・1付壺井繁治・栄宛卓書簡(壺井家蔵)による。栄「一粒のぶどう」(初出未詳 全集4)。
- 32 33に同じ。戸籍も同じ。
- 33 死亡と、葬儀の日にひきとつたとする記述には明らかな矛盾があるのだが、栄は全て九月二十九日にひきとつたと記しているので、しばらくこのままとしておく。
- 34 戸籍によると昭和26・4・27のことである。
- 35 37 栄「わが文学の故郷」(44・3「早稲田文学」)。
- 36 38 44・10・17「百合子日記」、44・10・18 付頭治宛百合子書簡。
- 37 39 栄「秋」(46・11「小天地」)。
- 38 40 新出の栄「茶の間日記」(前出)。
- 39 41 栄「自筆年譜」(前出)。
- 40 42 新出の栄「茶の間日記」(前出)。
- 41 43 同前。
- 42 44 繁治『激流の魚』(前出)。
- 43 45 栄「鷺宮二十年」(前出)。
- 44 46 45・7・14付百合子書簡。
- 45 47 佐々木克子「思い出の写真に寄せて」(「月報9」69・1 筑摩版全集9)。添田知道「ちやぶ台作家」(「回想の壺井栄」(前出))。